

山と博物館

第52巻 第8号 2007年8月25日

市立大町山岳博物館

動物写生

宮野 典夫

日本動物園水族館協会の中部ブロックでは子どもたちの動物愛護精神を高め、描写教育ならびに、文化の向上と親善を図ることを目的として、毎年各動物園で写生会を催しています。

大町山岳博物館では4月28日から9日間、写生大会を開催し、140名の園児・児童・生徒の皆さんが参加しました。特に大町東小学校では授業のひとつとして2年生全員が、飼育動物の見学や学習もかねて、写生に取り組んでいただきました。

5月に市内各小中学校の先生による審査会で23点を選出いただき、中部ブロックの審査に応募しました。山岳博物館の作品からは仁科台



長野県知事賞

仁科台中学校3年生 天木令奈さん「ふくろう」

この写生大会で動物の絵を描くことによって、普段はあまりじっくり見ることのできない姿から動物の特性をとらえていただけたものと思います。また、保護され野生では生きていくことができなくなった動物の経緯と現状から動物の命について考えるきっかけになっただけは幸いです。

(山岳博物館副館長)

中学校3年生の天木令奈さんが長野県知事賞に、大町南小学校4年生の降旗菜津美さんが長野県教育委員会賞に、白馬北小学校2年生の武田真洋さんが日本動物園水族館賞に、白馬北小学校5年生の武田実穂さんが中日賞に入選しました。

写生大会には市内在住の荒井泰三先生が来てくださり、児童たちに声かけをしてご指導をいただきました。また、博物館講堂では「アニマルウォッチングもつと近くで見よう」と題して、飼育動物の最も身近な存在である飼育員がとらえた写真の展示も同時に開催し、顔や足などの部分をアップでご覧いただきました。写生大会の会場となった付属園では学芸員が動物に関するレクチャーをして、約80人の方が耳を傾けてくださりました。動物飼育施設を巡回する「スタンプラリー」も開催し、職員手作りのスタンプに感嘆の声を上げてくださるお客様もいらっしゃいました。

山岳博物館の付属園は現在12種の動物を飼育しています。たくさん動物を飼育している施設ではありませんし、建物も老朽化しています。また、傷病鳥獣の救護も行っているため、野生に戻せない動物も飼育しています。

ザラ・針ノ木越えの検証(四)

小林 茂 喜

七 武功夜話の伝える成政一行

「武功夜話」は、成政の濱松来訪を次のように記しています。

越中の佐々蔵助此度の和議不服申し立て、馬乗二十有餘騎雪山万里の節所を越え、家康公に拜謁言上申しけるは、和議は一時の氣やすめ此のまま過ぎ候哉筑前の狡猾に陥り悔いを千歳に残すなり。此の機を失わず共に力を寄せ合ひ、東北方両道より兵を用いなば、四国、中国道、九国、紀州の諸將相呼応して烟を揚げ、腹背に敵を請け、進退極る処、それがしども北国道より江州へ乱入筑前の背後を衝かば、勝利を得ることかたかるべしと風雪を凌ぎ罷り来たり候なり。(中略)

一行馬乗二十騎は北国に名高き豪の者、佐々平左衛門、寺島甚助、佐々与左衛門、前野小兵衛、同又五郎、久世又助、神保越中等当千の者どもに候なり。

「武功夜話」は、前野(小坂)孫九郎雄吉、同小(将)右衛門長康、同小兵衛勝長三兄弟の事跡を中心に信長秀吉の時代の出来ごとをまとめたものです。長兄雄吉(かつよし)は織田信雄(幼名茶釜丸)の傳役、次兄長康は秀吉創業以来の功臣で、後に関白秀次の後見役となります。末弟勝長は佐々成政の宿老という立場にありました。それぞれが手控えや記録・手紙類を残しており、それを雄吉の嫡

孫で、親の代に帰農して前野村庄屋となった吉田雄瞿(かつかね)がまとめたものといえます。

それぞれの立場が立場であるだけに、天下統一期の諸事情を知るには極めて貴重な史料です。但し現存の「夜話」は雄瞿から三代跡の茂兵治が享保年中に書き写したといわれ、茂兵治は父の治右衛門雄利とともに「早引大節用集」という当時の百科事典を編纂した人物であるので、その該博な知識を以て江戸時代初期の関係文書にあたり、それを踏まえた上で「武功夜話」の完全性を期したことは十分予想できます。今引用した部分も、甫庵太閤記の記述に通うところがあります。但し他の史料に見えない事実が詳細に記されているところから、原文に記述されていた詳細は踏まえられているものと考えられます。関係する人物や日時について、原文が記述された当時すでに違いがあつたと見られるものは、異なつたまま併記されているからです。「馬上二十騎」も、小兵衛らがその年の年末に清洲を訪れた時のことを記した数とは違つています。それら詳細は、どちらが正しいか簡単に判定できないものの、全体的な状況は信憑性の高いものと判断されます。

そこでもう少し詳しく「武功夜話」の記述を見てみることにしましょう。

先に引用した箇所は、孫九郎雄吉が信雄に従つて岡崎へ到着したところ、家康は浜松へいるということが判つた。それでは浜松へと

なつた夜、宿舎へ、松平主殿助(家忠)がやつてきて「意外なること」を言つた、という書き出しで記されています。

家忠は言います。貴辺(雄吉)は信雄卿が茶釜丸と呼ばれた幼少の頃から家臣で功績も大きい。しかしながら、佐々内蔵助の随臣の中にはご舎弟の小兵衛勝長殿がおられる。浜松へ行つて家康公に会われると、何かと邪推されかねない。岡崎にとどまつて浜松へは行かれない方が賢明であろう、と。

信雄は、家康に礼を言い、単独で和議を結んでしまつた事を詫げる意味もあつて岡崎に來ましたが、家康が濱松に居ることを知つて濱松まで赴こうとしました。ちょうどその時成政が濱松へやつて來たので、孫九郎がそのまま同道すれば「前野兄弟が策略をめぐらして両者を合わせた」と言われかねないし、それは当然秀吉の許にある将右衛門長康を窮地に陥れることにもなるので「やめたほうがよい」と家忠が忠告したということです。

家康は「大量をもつて佐々殿を取り拵えなされ、路次の辛苦御勞りなされ、御一行随従の者まで、下にも置かぬ御饗応をなされ」と記されています。大変な厚遇です。但し家康は、今度の和議を尾張の民衆は喜んでいと言いました。今事を構えれば、治に乱を招く様なもので人々の共感を得られない。自重されるがよい、と諭しました。成政は「やむなく時節を慨嘆して越中へ罷り帰りました。そして「中将卿(信雄)と佐々殿とのご拜謁の儀、家康公密々をもつて取り計らい御避会つたが信雄には会わず、時節を嘆いて越中へ帰つたというのです。

私達は既に家忠日記により、二十五日に

吉良で成政が信雄に会つたことを知っています。ところが信雄が浜松へ來たのは家忠日記に十四日とあります。岡崎で家忠と孫九郎が会つたのは、当然それ以前です。それならば家忠は、成政が來て家康と会つたことを、成政が浜松に來る前に孫九郎に告げたということになります。明らかに矛盾しています。家忠の日記にも小坂孫九郎のことは何度か出てくるので、二人が懇意にしていたことは間違いありません。また孫九郎が浜松へ赴かなかつたことは事実ですから、そのあたりの事情を記したこの部分の記述を疑うわけにはいきません。では、どう考えればよいのでしょうか。

八 天正十二年十二月晦日、尾州前

野村

武功夜話によると、成政一行は、十二月の晦日にひそかに前野村を訪ねています。

この日西の六ツ半刻(午後七時頃)前野村の小坂孫九郎雄吉宅へ予期せぬ來客がありました。顔ぶれは、孫九郎の舎弟前野小兵衛、小兵衛の倅又五郎と嘉兵衛、佐々平左衛門とその従者桜木等の八人でした。一行は前野家に留まること五日にして、正月三日の西四ツ刻(夜十時。但し西ならば六ツ前後、四ツならば亥が適當ではないかと思われ)頃、十五歳になる嘉兵衛一人を孫九郎の許に残し越中へと発つていきました。

この嘉兵衛は、そのまま前野村に留まつて江戸時代を向かえ、この武功夜話の原本が記された当時、まだ生存していたと記されてい

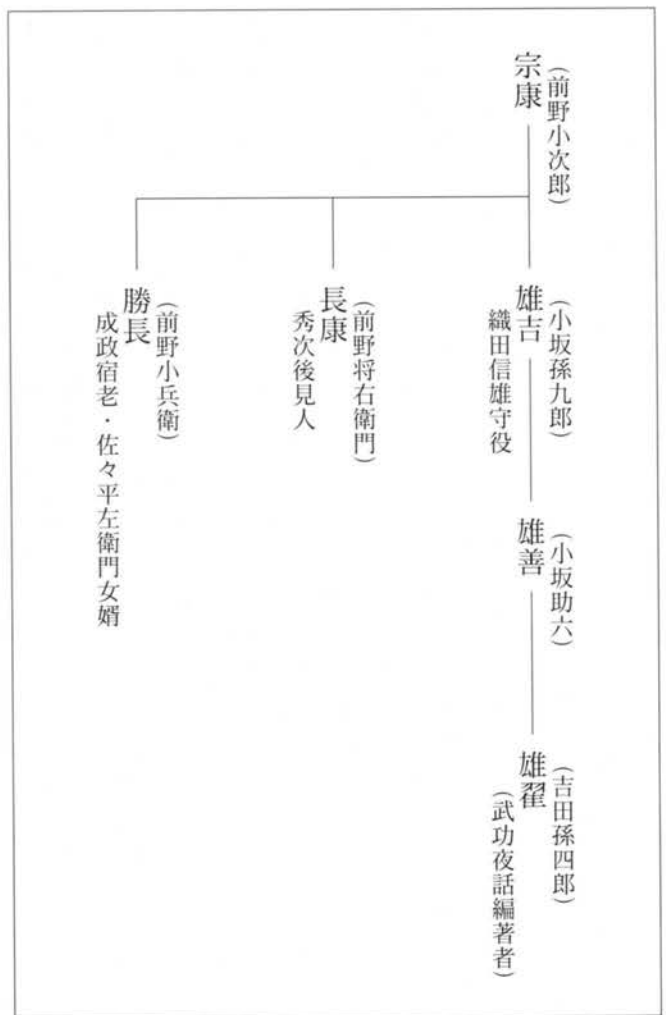


図3 前野三兄弟系図

得ないことでした。家康も信雄を助けるといふ大儀がなくなれば、秀吉と戦う理由はありません。まさに時既に遅かったのです。成政の冒険は何ももたらすところありませんでした。その心中は慨嘆というより絶望と言うべきであつただろうと推測します。

さて、では成政は、清洲からどこを通過して越中へ帰つたのでしょうか。十一月二十三日に富山を出たと言ふのが正確であるならば、最早二ヶ月に近い日を旅に送つています。信雄は勿論家康にも蜂起の可能性がないと知れば、一刻も早く富山に帰つて戦略を練り防備を固めなければなりません。富山を離れていると言ふ噂がどこでどう飛びかかっているとも限らないからです。

その結論に達するためには、先ほど触れた家忠日記と武功夜話の記述の矛盾についてここで考えてみなければなりません。武功夜話は、六十人ばかりの信雄一行ができるだけ目立たぬよう家康に会うために岡崎にやってきましたと記述しています。ところが家康は岡崎ではなく浜松にいたということが判つたので浜松へ行くこととしていたところ、孫九郎の宿所へ家忠がやってきて、成政が浜松へやってきたことを知らせ孫九郎の浜松行きを止めた、と記述しています。

先にも見たように、信雄が浜松の家康の許を訪れているのは十二月の十四日です。前々日の十二日には、家康の次男於義丸(後の結城秀康)が、大阪に向けて雨の中浜松を発つています。その二日前の十日には石川数正が岡崎に来ており、家忠も岡崎に行つています。おそらく於義丸を迎える打ち合わせのためでしょう。もし、武功夜話の孫九郎の述懐を事実とするならば、この十日が家忠の孫九郎訪問の期日ということになるでしょう。すると成政の浜松訪問はそれより以前ということになります。十日より以前、果たして成政は家康にあうことができたのでしょうか。

そういうことは考えにくいことです。理由はいくつもあります。

第一に、この時期浜松は、於義丸の人質としての下阪を前にして、常でない慌しきと緊張の中にあつたと想像されます。家臣達もこの是非を論争したばかりです。於義丸の下阪以前に成政が家康に会つたとしたら、成政は当然家康に思いとどまるよう説得したでしょう。家康もそれを承知で成政と会うことになりません。しかし、それはどこにどうするか判らぬ大阪方の間者に知れば、無用な不

ますから、このあたりに関する記述は信頼性の高いものといふことができます。

巻一四の、孫九郎が岡崎で家忠に会つた時のことを記した部分には、成政は信雄にあわず時勢を慨嘆して越中へ帰つたと記されていますが、事実はこのように年末に清洲へ来て、何度かにあつた信雄と会談しています。したがって、一四巻の記述は、誤りとすべきでしょう。

この時佐々成政も生駒八右衛門宅へやって来ていました。八右衛門は信雄の生母吉乃の方の兄で信雄には伯父にあたる人物です。成政が八右衛門宅を訪れたのは、信雄へのとりなしを依頼するのに最も適当と考えたからでしょう。成政は激しく八右衛門に詰めよ

も効を奏しませんでした。

信雄と秀吉との戦いは信雄に分が悪く、特に兵糧が欠乏していました。家康は長期戦を覚悟し小牧・長久手の戦線を固めつつ攻勢をかけていました。しかし、収穫の時期とも重なつた為、尾張の山野は厭戦気分にあつてい

たということでした。秀吉も、主君の家を絶つ汚名を避けたかつたからでしょうか、朝廷にはたつきかけて講和促進の勅定を出させ、犬山城等を返還すると共に兵糧を提供するとい

う好条件を示して、まず信雄と単独講和を結びました。その上、家康には両家融和のため次男於義丸を養子として迎えたいと持ちかけ、信雄からは娘を人質として差し出させたのです。そういう事情があつたので、成政がどのように口説きその主張がどのように正しかつたとしても、信雄が講和を覆す事はありません。

では、往路はどうだったのでしょうか。

信を秀吉に与えることにもなりましょう。そういう選択を家康がするでしょうか。

第二に、仮に成政が十日以前に浜松へやってきたとして、於義丸の下阪をはきんで信雄に会う二十五日まで、なぜ、どこで何をしていたのでしょうか。これも考えにくいことだと思います。

ここで私たちはもう一度家忠の日記の記述を注意深く読んで見なければならぬことに気づきます。再掲してみましょう。成政は次のように記しています。

二十五日(天正一二年二月)丁卯、越中佐々藏助濱松へこし候て、吉良ニ信雄様御／鷹野ニ御座候御禮申候、□むかいにてふる舞候

この記述は、次の四通りに解釈できます。
①二十五日に成政が浜松へやってきた。その日のうちに吉良で鷹狩をしている信雄に会って、信雄が成政を歓迎したという解釈。
②成政が二十五日以前に浜松へやってきて、二十五日に吉良で鷹狩をしていた信雄に会った。信雄が礼を言って歓迎したという解釈。
③二十五日、成政が浜松へやってきて家康と歓談し、その後吉良へ行つて信雄と会って礼を言われた。という解釈。

④成政が二十五日、浜松へやってきた。その前に吉良で信雄に会って礼を言われた。家康が誰かを迎えるに立てて成政を歓迎した。という解釈。

吉良と浜松は七十キロ近く離れている。成政が浜松へやってきて家康と戦略に関わる込み入った話をし(成政はそのために自らが出

かけてきたのだから)、家康が成政主従を歓迎し、それからその日のうちに吉良へ行つて信雄に会い、その歓迎をうけるといえるのは可能ではないでしょう。浜松吉良間は、馬でとばしたとしても移動するだけで小半日はかかると思われまふ。それに昼日中、異様な風体をした騎馬武者が二、三十騎も街道を疾駆すれば、何かと人目にもつきます。したがって、①の説は成り立ちにくいと考えます。

②、③の説は成り立つように思えます。二十五日以前に成政が浜松へやってきていれば、二十五日に吉良へ行つて信雄と歓談することは可能です。また、二十五日に浜松へやってきた成政が後日吉良を訪れるということも可能です。しかし、これにも重大な難点があります。まず③の場合、二十五日以降に起こったことをなせ、二十五日の項に記すことができたのでしょうか。後から日記を書いたとしても、それならば実際に成政が信雄とあった日付のところに記せばいいでしょう。それは②についてもいえることで、成政が二十五日以前にやってきたのなら、なぜ、やってきた日にそれを記さなかったのでしょうか。第一家忠は、吉良での成政と信雄の会見の様子を自らの目で見たのでしょうか。そんなはずはありません。家忠が成政と共に吉良まで行く理由は何もないからです。とすると吉良でのことは伝聞ということになります。それを何時、どのように聞いたのでしょうか。

そう考えると、成政が浜松へやってきたのはやはり二十五日だったのです。そしてその日家忠は、成政本人か、または一行の誰かから吉良での様子を聞いたのです。だから両方をこの日の項に記した。つまり成政が浜松へ来た時は、既に信雄に会った後だったのです。

すると「ふる舞い」は家康によって行われたことになり、他の史書類にいう「家康が成政を歓迎した」ということと符号してきます。つまり④の解釈が妥当ということになります。そしてそうであるならば、成政は、岡崎方面から吉良を通り、浜松へやってきたことになりまふ。ですから成政は越信の險難、つまりザラ峠を越えなかつたのです。一旦家康のいる浜松を素通りして吉良へ行き、取って返して浜松へ戻り、更に再び^{つづ}を返して清洲へ行くというような無駄で危険の多い動きをするはずがないからです。武功夜話の拾遺である「千代女書留」の中には、成政が「岡崎から浜松へと向かつた」と明確に記されています。成政は、往路もザラ越えを使わず、復路と同じ飛騨高山經由の道筋をたどつたのではないかと私は思います。

(信濃史学会会員) (つづく)

博物館だより

大町山岳博物館では次の企画展・イベントを開催します。ぜひご高覧、ご参加をしてください。

企画展「キノコ展」

■内容

毎年恒例の企画展です。大町地方の食べられるキノコ、食べられないキノコを一同に展示します。100点以上のキノコの実物と写真で紹介いたします。会期中のみキノコ鑑定会を予定。

■会期 9月29日(土)・30日(日)

■時間 午前9時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)

■会場 市立大町山岳博物館講堂

■観覧料 無料

キノコ学習会

■内容

キノコを実際に観察し、講師の先生から指導を受けたり、図鑑で名前を調べたりします。

■日時 9月30日(日)

■その他 午前7時～午後1時

申し込みが必要です。申し込みは9月15日(土)から開始します。集合場所、持ち物、服装などは申し込み時におたずねください。

山博おもしろミニゼミ

■内容

山岳博物館の学芸員などのスタッフが展示に関する事、調査研究した内容、体験したことなどを約10分程度で解説します。

■日時 毎週土・日曜日

午前10時と午後2時の2回。

■その他 午前と午後の内容は同じです。詳しくはお問い合わせください。

山と博物館 第52巻 第8号

発行 千 長野県大町市大町八〇五六一一

市立大町山岳博物館

TEL 〇二六-一三三-〇二二

FAX 〇二六-一三三-〇二二

E-mail: smpak@city.omachi.nagano.jp

URL: http://www.city.omachi.nagano.jp/smpak/

印刷 榎奥村印刷

定価 年額 一、五〇〇円(送料含む)(切手不可)

郵便振替口座番号 〇〇五四〇七一三三九三